

大手予備校の代々木ゼミナールが全国の拠点を大幅に削減し、模擬試験などの業務も縮小すると発表した話題となっている。日本創成会議が五月に発表した消滅可能都市など、最近では消滅や縮小が流行である。共通する原因は人口減少と技術革新で、かつての産業革命の時代にも多数の職業や企業の消滅や、人口の都市への移動による農村の衰退などが発生し、歴史に何度も登場してきた現象である。

しかし、今回の消滅は速度が急速という特徴がある。アメリカの大学教授キャシー・デビドソンは「現在の子供が大人になったとき六五％の子供は現在存在しない職業に就業する」と予測し、アメリカの未来学者トマス・フレイも「これからの数十年間で現存する世界のすべての仕事の半分に相当する二〇億人分の仕事が消滅する」と発言している。これらの発言の根拠は技術革新、とりわけ情報通信技術の浸透である。

さらに広範な予測を発表したのがオックスフォード大学による「雇用の未来…情報技術に影響されやすい仕事」という報告である。これは現存する七〇二の職業について消滅 possible の順位を計算している衝撃の労作である。消滅すると予測される上位一〇番は、通信販売業、文章要約業、手縫い職人、数理解析者、保険引受業、時計修理業、輸送手続業、納税手続業、写真修正業、経理事務業、図書管理業になっている。

反対に消滅しにくい上位一〇番は、余暇相談業、修理監督業、危機管理業、健康相談業、聴覚研究者、職業相談業、機能回復業、健康管理業、口腔外科医、防火監督業となっている。職業相談業が上位にあるのは愛嬌であるが、共通するのは人間の健康や病気などの不安について相談相手をする仕事が上位に集中していることである。反対に下位にはコンピュータをはじめ情報技術で代替できる職業が集中している。

当然、技術革新が進展しても技術が代替できない職業が永續するという結論になるが、これを予測することは容易ではない。明治時代の女性の花形職業に電話交換の仕事があった。良家の子女が就業し、人力車で送迎されるほどの仕事であったが、当時、自動交換技術が登場することは予測不能であった。無声映画時代の花形は活動弁士であり、徳川夢声をはじめ多数の英雄が誕生したが、トーキーの出現の予測は困難であった。

これらの歴史を参照すると、職業選択は容易ではないが、いくつかの法則は発見できる。大学で就職担当をしていたとき、学生は昨年まで業績のよい分野へ殺到する傾向があった。ところが企業全盛三〇年説が登場し、巨大企業でも業態を変更しなければ全盛時代は三〇年程でしかないという経験法則が話題となった。学生が就職すれば一五年後には下降時期に突入するから、全盛の職業は選択しないのが得策となる。

第二はコモディティにならない職業を選択することである。つまり人間が実施しても機械が実行しても差異がないと仕事になったときに、人間の職業としては衰退していくことになる。人間相手の相談業務が存続する職業の上位にあるが、最近のように人工知能技術が発達すると、アザラシの子供の形状をした「パロ」というロボットが老人などの相手をして人気であるように、それらの職業も長期に安定かは疑問となる。

そこで第三は、最近の若者が選択しているように、随時、転職して一定の職業に就業しない戦略である。これは安定しないうえに才能も必要であるし、野村克也選手や城島健司選手のように生涯仕事を変更しない人間が賞賛される日本社会では容易ではない選択であるが、オックスフォード大学の調査が明示するように、急速に仕事や職業の盛衰が発生している時代には最適の戦略かもしれない。